

きぬがさ 3 – 復活する祭礼の蓋 –

段 上 達 雄

【要 旨】

祭礼の神幸行列で用いられる錦蓋の中には、垂下式で周囲の幕の丈が長いものがある。京都下鴨神社の御蔭祭における神霊を載せた神馬を覆う錦蓋が始まりと考えられ、それ自身が神輿と同様の役割を持ち、大嘗祭の菅蓋に祖型を求めることができる。この垂下式の錦蓋は各地に伝播するが、近世に伝えられた福岡県直方市の多賀神社のもの以外は神輿に随伴する威儀具となっており、その多くは近代になって導入されたものと考えられる。

【キーワード】

垂下式の蓋、馬上の蓋、下鴨神社の御蔭祭、直方多賀神社の日若祭 伊賀の上野天神宮、

(1) 垂下式の蓋

三重県伊賀市上野東町の上野天神宮（菅原神社）の上野天神祭の神幸祭を見学した。この祭りの特色ともいえる鬼行列やだんじり（楼車）が進む前に、神輿を中心とした神幸行列が伊賀上野の街並みの中を練り歩く。この神幸行列で初めて垂下式の錦蓋と菅蓋を見て不思議に思った。なぜなら、^{けい}門字型の枠の上部中央から蓋が吊り下げていたからである。傘の中央に柄のついた傘鉾や風流傘を見慣れていたが、^{けい}門字型の枠から吊す形式の傘を見たのはそれが初めてだったのである。その後、各地の傘鉾や蓋の出る祭礼を調べてゆくと、この^{けい}門字型枠の垂下式錦蓋がいくつかあることに気づいた。



写真 1：上野天神祭の錦蓋

伊賀上野の上野天神宮の上野天神祭の行列は、「神輿行列」「鬼行列」「だんじり（楼車）と印」の3つに大別することができる。だんじり（楼車）と印（町印の山車等）、それに鬼行列は町という地域単位で担当している。それに対して、神輿を中心とした行列は氏子たちが参加するとはいえ、上野天神宮で組織したものである。錦蓋と菅蓋は神輿の前を進んでおり、まさにこれは神輿の威儀具であるといえよう。しかし、垂下式の蓋は大嘗祭での菅蓋に見られるが、冂字型の枠ではなく、先端に吊り飾りの鳳凰（鸞鳥）型のついた棹で蓋を吊り下げている。このような冂字型の枠に垂下する蓋は、どのような経緯で成立したのだろうか。

（2）馬上の蓋

直方多賀神社の日若祭

福岡県直方市の多賀神社の神幸祭「日若祭」は3年に1度、10月第3金曜日から日曜日まで秋季大祭「日若祭」が行われる。神幸行列は神社正門を出て、先頭は旧南多賀町より南方の位置で停止し、正門までの道路に整列してから午後3時に出発する。お下りは旧南多賀町、新町一丁目、新町三丁目、直方南小学校通りを経て、新町本通りに戻り、午後4時40分に新町一丁目の頓宮（須賀神社）に着御する。お上がりは午後5時30分に発御となり、殿町、古町本通りを経て、外町、直方駅（須崎町内）、明治町、古町、旧多賀町を経て、午後8時に多賀神社に還御する。神幸祭には御供山笠4基が随伴するが、お下りでは新町区流、多賀区流、古町中区流、古町北区流の順に巡行し、お上りでは逆に古町北区流、古町中区流、多賀区流、新町区流の順となる。

日若祭の錦蓋と菅蓋

日若祭（御神幸）では冂字型枠に垂下する「御錦蓋」が用いられる。旧記に「不用神輿御神馬」と記されているというが、多賀神社の御神幸は神霊の渡御に神輿を用いず、神馬に神霊（依代）を奉載して渡御する「御神馬御錦蓋」の形態であることが特徴である。神馬の鞍上に神霊の入った容器を載せ、それを錦蓋で覆うのである。

錦蓋は直径が約1mあり、朱色の錦で傘部を覆い、同色の錦を用いて幅約0.9mの帽額とする。その朱色の帽額の下部に薄黄色の錦8枚縫い付け、馬上の神霊を覆いやすくする。多賀神社では冂字型枠に下げる垂下式菅蓋が神馬に随行するのが特徴である。菅蓋の直径は約1.2mあり、幅約1.2mの薄黄色の錦で帽額としている。ここでは錦蓋と菅蓋双方に鳳凰（鸞鳥）のついた棹を差し掛ける。

直方多賀神社と青山敏文

南北朝期に懐良親王が征討宮として直方を訪れた時に多賀神社を再建して神田と神馬を奉納したと伝え、それが直方市の多賀神社の神幸祭の始まりであるといい、現在の神幸祭は直方藩（東蓮寺藩）主黒田長清の時（1688～1720在任）に大宮司青山大炊頭敏文（1671～1754）が再興したと伝える。青山敏文は優れた国学者で、京都滞在中に親交のあった賀茂真淵や荷田春満らと共に和歌の復興を図ったり、御所で御進講するほどであったという。

京都滞在中、葵祭の時に勅許によって揚輿に乗ったことを契機に、それ以来、直方の多賀神社では宮司が神幸祭の時に揚輿に乗って行列に供奉するようになったと伝える。地元に必要な言い伝えがある。「直方に過ぎたるものが三つある。その一つにごんの揚輿」さて、このように青山敏文は京都の国学者らと親しく交流したが、彼は多賀神社とその地域の神道に大きな変革をもたらした。『筑前国続風土記』の直方の項に「むかし此所に在し妙見の社は北の山に移さる。元禄年中社人青山祝部<敏文のこと>が願により、いにしへの神名にかへりて多賀大明神と改む、其額は油小路大納言隆貞卿の筆なり」と書かれ、『直方由来記』に「此御神は神代より山上に鎮座ましまして、日の若宮とあがめ奉りて、祭礼を日若祭と申習はし侍る、何時頃よりか御山を妙見山、御神を妙見大明神と世々称え侍るなり（中略）元禄五年<1693>長清公多賀の神山に御館を築かせ給ふに仍て御社を今の山の尾に移させ給ふ、其頃の大宮司より禁裏へ御願申上神号を多賀大明神と勅命を下し賜へり」と記されている。青山敏文は神仏習合の妙見社を多賀大明神に改名し、「御神馬御錦蓋」による多賀神社神幸祭を創作したのである。また、彼は近在の諸社の由来由緒書を書き、地元の社家神楽に宮中内侍所の御神楽の要素を取り入れたという。そのため嘉穂地域の筑前神楽はそれ以外の地域の筑前神楽と趣が異なるため、筑前系直方流神楽という名称となっている。彼は筑前における神道の改革者であった。

青山敏文が、多賀神社で御神馬御錦蓋を工夫して創作したとは思えない。そうであるならば、どこから取り入れたのだろうか。青山敏文が上京していたことは重要である。その京都に同様な錦蓋を用いる祭りがある。賀茂御祖神社（下鴨神社）の御蔭祭である。

（3）下鴨神社の御蔭祭

現代の御蔭祭

京都市左京区上高野東山の御蔭神社（境外摂社）と本社である賀茂御祖神社（下鴨神社）では、葵祭に先駆けて毎年5月12日に御蔭祭が行われる。2012年の御蔭祭は次のように執行された。

5月12日朝、賀茂御祖神社の境内では御蔭祭に参加する人たちが整列し、舞殿で神職たちが巫女によって祓い清められ、手を清めた後、御手洗川の傍らで解除の樹下神事が執行される。午前9時頃に「行粧（行列）進発」となる。橋殿に置かれていた武具や旗などの威儀具が配られ、行列を整えて御蔭神社に進発する時に「勸盃の儀」が行われる。行列は糺の森の途中まで進み、自動車に分乗して八瀬の御蔭神社近くまで行く。御蔭神社では「御蔭山之儀」が執行される。これは遷座の神事であるが、本殿と拝殿を囲む玉垣と張り巡らされた幔幕によって、神事の様子を外から窺うことはできない。その後、荒魂を納めた神霊櫃（小型の唐櫃）を中心に、行粧は御蔭神社を出発して賀茂御祖神社に向かう。神霊櫃はトラックに載せられて御錦蓋で覆われる。行粧は一乗寺赤宮町に鎮座する赤の宮神社（賀茂波爾社・神領内総社）に寄って「路次祭」を行い、舞殿では舞楽「還城楽」が演じ

られる。行粧は再び自動車に分乗し、下鴨東通を南下し、糺の森の南端を廻って下鴨本通を北上して北山通を西進し、北山駅の手前から南下し、北大路下鴨中通で下車する。そして、下鴨貴船町の中川原児童公園で神霊は神馬に遷座する。錦蓋が公園に設けられた青白幕で囲われた幄舎（テント）内に持ち込まれ、その直後に神霊櫃と白馬も入る。警蹕の声と共に幄舎の中で神霊は白馬の鞍上に遷御される。ここから、その馬の背を錦蓋で覆って渡御することになる。御蔭祭では神幸に神輿を用いない。下鴨貴船町で神幸列を組んで狭い下鴨中通を南下し、河合神社を経て糺の森に入る。行粧には御神霊の載った白馬と共に武官の乗る2頭の馬、宮司の乗る馬車、唐鞍の飾り馬、鉾や楯なども加わる。午後4時から糺の森で「切芝神事」が行われる。斎場となる切芝には神馬幄が設けられる。神霊を載せた神馬は神馬幄に入って幔幕から頭部だけ出す。切芝に6人の舞人が登場して2列になって対面する。鞆鼓・箏・唐笛・横笛・和琴などの楽人が演奏し、付歌（合唱隊）が古代歌謡を唱和する中を優雅に「東遊」が二度演じられる。神を讃える「三代詠」が行われる。切芝神事が終わると、行粧を整え、神馬も加わって本殿に向かい、本殿前で神馬から神霊を遷す儀式があり、本殿に遷御となる。その後、本宮之儀が執行される。

交通事情の悪化により、昭和38年から道中は自動車を用いた車列となっているが、それ以前の御蔭祭の行粧路を次に記す。賀茂御祖神社を出発して糺の森を南下し、御蔭通りを東に折れて御蔭橋（高野川）を渡る。川端通を北上して白川通に入り、花園橋（高野川）を渡り、東に向かい、御蔭神社に至る。帰路は御蔭神社を出て新田街道を南下し、赤の宮神社で「路次祭」を行い、新田街道を再び南下して糺の森の南端近くの河合神社で神事を執行した後、糺の森で「切芝神事」を行って賀茂御祖神社に戻ったのである。

御蔭祭の歴史

明治初年の神社祭祀法制化以前の祭事を旧祭式、以後のものを新祭式と区別するが、御蔭祭は旧祭式時代には御生神事みあれと呼ばれ、旧暦4月午の日に行われていた。御蔭祭は比叡山山麓の八瀬御蔭山から賀茂御祖神社に神霊（荒魂）を迎える神事である。御蔭神社の祭神は賀茂建角身命かもたけつぬみのみこと（西殿）と玉依媛命みあれ（東殿）であり、『山城風土記』によれば、御蔭神社は、この二柱の神々によって賀茂別雷神、すなわち賀茂別雷神（上賀茂神社祭神）が産まれた場所であるという。

『御祖神社御事歴以下明細調記』（1894）によれば、綏靖天皇の頃に御生神事が始められたというが、そのまま史実とするには根拠が薄い。『延喜式』「内蔵寮式」の賀茂祭の項に「阿礼料」と記されていることから、10世紀半ば頃には下鴨神社の御生神事みあれが行われていたことは間違いのないと思われる。『源氏物語』に「みあれに詣で給ふとて」と記され、「みあれ」や「御蔭山」などの詞が、当時の貴族の日記や歌集などに散見されることから、平安期には既に注目されるほどの祭事となっていたことがわかる。また、『賀茂史綱』の安永元年（1120）12月22日の条に「鴨社昨年焼失鞍焼。於官行幸所被造調被奉納事」という記事があるが、この焼けた鞍は御生神事に用いられていた神馬の唐鞍と推測され、このことから12世紀初頭には神馬を錦蓋で覆う行粧が既に行われていたものと思われる。御生神事がいつ始まったのかは明確ではないが、平安期には現行のものに近い形式に整備されて

いたであろう。しかし、応仁の乱（1467～77）によって、賀茂御祖神社も葵祭も大きな被害を受けることになる。文明2年（1470）6月14日、賀茂御祖神社と札の森が兵火によって焼亡したのである。その影響は祭事にも及び、葵祭と御生神事は永正14年（1517）を最後に中断する。そしてその後、約180年を経てようやく元禄7年（1695）に葵祭と御生神事が再興され、今に至っている。

御蔭祭の錦蓋

御蔭祭の錦蓋の傘部は直径約1.2m、白い練り絹で覆う。傘の周縁部から幅40cmほどの宝相華紋の深緑色の錦の帽額（幕）を垂らし、その内側に幅120cmほどの葵唐草紋の朱色の錦の帽額を垂らす。傘周縁部には8カ所に鈴と長さ約140cmの朱色の飾り紐（総角結び）を取り付ける。円字型の枠は金平文の黒漆塗りの丸い棒を綱で直角に結びつけたもので、持ち手となる縦の棒は約150cm、錦蓋本体を吊り下げる横棒は長さ約150cmある。錦蓋は飾り紐と同じ朱色の絹紐で円字型の枠に結びつけられている。円字型枠の上には、先端に鸞鳥のついた棹を後ろから斜めに掛け渡す。あたかも鸞鳥が枠の横棒の中心に止まっているように軽く載せるのである。その棹は長さ約3mほどの黒漆塗りで、先端に木彫の鸞鳥が装着されている。鸞鳥とは五色の羽をもち、鶏に似た鳳凰の一種で、天子に関わる瑞鳥であるという。御蔭祭の錦蓋の特徴は、円字型の枠から吊り下げる垂下式の蓋であること、傘の直径とほぼ同じか、それよりもやや長い幅の幕をめぐるせ、上部外側にも一枚幅の短い幕を下げることで、先端に木彫の鸞鳥が装着された長大な棹を後ろから差し掛けることの3点である。なぜ、このような形態の蓋が考え出されたのだろうか。円字型枠に垂下する錦蓋は周囲に長い幕を張り巡らせているため、馬の背に載せた神霊を納めた容器を人の目に触れないようにすることが可能である。円字型枠の両側の棒を1名ずつで捧持する方法を用いると、神霊の容器をしっかりと覆うことができる。また、馬の両側面で保持するため、馬が暴れた時に蹴られる心配もない。しかし、不思議なのは鸞鳥のついた棹を斜め後方から差し掛けることである。装飾とするだけなら、鸞鳥を円字型枠の横棒の中央に取り付けばよい。これは機能的にはまったく意味をなさない道具なのである。



写真2：御蔭祭御錦蓋正面



写真3：御蔭祭の錦蓋側面

垂下式の蓋については「きぬがさ2—古代王権と蓋—」において、大嘗祭における天皇に差し掛けられる菅蓋について既に紹介しているが、煩をいとわずに、もう一度その形態と使用法について述べてみたい。

大嘗祭で用いられる菅蓋は垂下式で、蓋を吊り下げる棹の先端は湾曲し、その先には見事に彩色された鳳凰像を載せ、その嘴が菅蓋を吊る紐をくわえるような造作になっている。菅蓋の中心下部には2本の紐が装着されている。この菅蓋は文字通り、傘部は絹ではなく、編んだ菅で形作られている。天皇の後ろに付き従う侍者の1名が、菅蓋の柄を両手で捧げ持って天皇の頭上に斜めに差し掛け、天皇の左右やや後方を随行する侍者2名が蓋下の紐を両手で持って、菅蓋が天皇の頭上に位置するように調整する。

この大嘗祭の菅蓋を吊り下げる鳳凰のついた1本の柄、それに菅蓋下部中央に装着された2本の紐、これこそ御蔭祭の錦蓋の杵と鸞鳥の原型ではないだろうか。人に差し掛ける場合と神櫃を載せた馬に差し掛ける場合では、蓋の吊り下げ方法に違いがあって当然である。2本の紐は蓋を下げる木製の門字型杵となり、そのため蓋を吊り下げる棹は不用となり、鸞鳥のついた長い棹状の棒を杵の上に乗せるだけの形式的なものに退化したのではないか。そう推測されるのである。

垂下式錦蓋の伝播

賀茂御祖神社（下鴨神社）の御蔭祭の錦蓋は古来から行われていた祭事である。この御蔭祭の特徴は馬の背に神霊櫃を載せて錦蓋で覆うもので、福岡県直方市の多賀神社のものとはほぼ同じである。直方の神職青山敏文が上京して社名改称を禁裏に願い出たのは元禄5年（1693）のことで、御蔭祭の復興は元禄7年（1695）である。青山の京都滞在中は、まさに下鴨神社の御蔭祭復興の準備をしていた時期である。そして多賀神社の神幸祭「日若祭」が始まったのは、直方藩主黒田長清の代であるという。それは元禄8年（1688）から享保5年（1720）のことであった。多賀神社の社伝でも、同社の御神馬御錦蓋は、下鴨神社の御蔭祭の錦蓋を青山敏文が導入したと伝え、青山敏文は復興途上の御蔭祭の情報をいち早く入手し、多賀神社の日若祭に錦蓋を導入したのである。なお、多賀神社では御神馬錦蓋に菅蓋が随伴するが、御蔭祭には菅蓋は出ない。この多賀神社の神幸祭において御神馬錦蓋に随伴する菅蓋は、大嘗祭の菅蓋か伊勢神宮の式年遷宮の菅蓋を参考にしたものであろう。日若祭創設期なのか近代になってからなのか、導入時期については詳細は不明であるが、青山敏文の博識さから考え、当初からのものの可能性が高い。しかし、多賀神社の錦蓋は、下鴨神社の御蔭祭の錦蓋を実に見事に模倣しており、御蔭祭の垂下式錦蓋の地方伝播のきわめて初期の段階のものであるといえる。次に「御神馬御錦蓋」のように馬の背に載せた神櫃を覆う垂下式錦蓋とは違い、垂下式錦蓋が独立して用いられている例について見てゆきたい。

(4) 大阪天神祭の錦蓋と菅蓋

大規模都市祭礼の場合、氏子圏の祭礼町が山車や屋台などの付け祭りの出し物を担当することが多い。しかし、大阪天満宮の天神祭の場合、さまざまな出し物の多くを講という任意団体の組織が担当しているのが特徴である。この大阪天満宮の天神祭の行列に錦蓋と菅蓋、そして風流大傘などが登場する。現在、大阪天満宮では7月24日と25日に天神祭を行っており、25日の陸渡御と船渡御に「御錦蓋」「御菅蓋」「風流御花傘」が参加している。

24日は早朝4時に一番太鼓が鳴り響き、祭りの始まりを告げる。7時45分から宵宮祭が本殿で執行され、8時20分に本社から斎場に向かって鉾流神事の行列が行われる。8時50分から鉾流橋のもとにある斎場で鉾流し神事を執行。夕方4時から獅子舞と催太鼓が氏子町を巡行し、7時には宮入といって大阪天満宮に戻る。

25日は午後2時から本殿で本宮祭が執り行われる。2時40分に神霊移御祭があり、神霊を御鳳輦に遷座する。4時に陸渡御の行列が発進。陸渡御列は下記の通りである。

第一陣／催太鼓・猿田彦・神鉾・地車・獅子舞・狸々山車・采女・稚児・文車・牛曳童子・錦旗・風流梅花傘・神饌唐櫃。

第二陣／総奉行・御錦蓋・御菅蓋・伶人（雅楽器）・（紫翳）・御鳳輦・（菅翳）・瑞枝童子・宮司・氏子総代・協賛会委員・鳳御輿・玉御輿・天神祭囃子。天神橋近くで奉安船と供奉船等に乗船し、奉拝船には飛翔橋近くで乗船して、午後6時から船渡御が始まる。7時に御鳳輦奉安船上で船上祭が執り行われ、10時に宮入りして本殿で還御祭が執行されて、天神祭は終了する。なお、船渡御らは次のような船が出る（2010年）。



写真4：天神祭風流梅花傘



写真5：天神祭御錦蓋



写真6：天神祭御菅蓋

①奉安船と供奉船／催太鼓船、神鉾講船、御神酒講供奉船、地車講船、福梅講船、花傘講船、天神講獅子船、金幣船、文楽船、落語船、御羽車奉安船、御文庫講船、丑日講船、御旗講船、御錦蓋講船、大阪天満 LC 奉仕講船、御鳳輦奉安船、献茶船、箒講船、鳳御輿奉安船、玉御輿奉安船。②列外船／どんどこ船、人形船。③舞台船／神楽奉納船、天神祭囃子奉納船、能奉納船。④奉拝船／大阪商工会議所船・大阪市船、支部・協賛会委員船、市民船、サントリー奉拝船、日清奉拝船。

御錦蓋は直径約1.2mの蓋で、その傘裂は朱の花模様の錦である。傘部の周囲には二重に帽額(幕)を下げる。上部外側の短い帽額は朱地に金の星梅鉢紋と銀の松枝の刺繍を散らしたもので、内側に吊す丈の長い帽額は立涌紋に梅花と松葉を散らした金欄である。傘上部中心から鈴をつけた朱色の長い飾り紐(総角結び)を8本垂らす。これを黒漆塗りで端金具をつけた門字型枠で吊り下げる。これを木製の瑞垣で囲んだ台車の上に載せ、前後に突き出た棒(本来は担ぎ棒)を持って進む。先端に鸞鳥を装着した長い棹を背後から差し伸べ、錦蓋を吊り下げる枠の中心にあたかも鸞鳥が留まっているかのように載せる。

菅で編んだ御菅蓋も直径が約1.2mあり、それを黒漆塗りで端金具をつけた門字型枠で吊り下げる。帽額は丈約1.2mで、菱形に組み合わせた松葉紋の中に交互に星梅鉢紋と三階松紋を散らした金欄で、菅蓋周縁部の内側から吊り下げる。朱色の長い総角結びを8本垂らす。蓋の周縁部内側から吊り下げている。御錦蓋が台車に載せられて移動するのと違って、御菅蓋は二人で枠を捧持する。

風流梅花傘の傘紙は黒色で、帽額は星梅紋を白抜きにした紺地、そして傘上部から連続した紅白梅花の紙製造花をつけたヒゴを何本も下げる。住吉大社の御田植神事で仮設舞台上に風流花傘が立てられるが、黒い傘紙は同じで、赤と白色の「綿の花」と呼ばれる紙飾りの代わりに紅白梅の紙飾りがつけられているだけで、形態的にはほぼ同じであり、天神祭の風流花傘が御田植祭の風流花傘の模倣であることは一目瞭然である。

米山俊直によれば、大阪天満宮の天神祭の錦蓋と菅蓋は、明治13年(1880)の記録には出てこないが、昭和6年(1931)には「御錦蓋(米穀商)」「御菅蓋(久栄講)」として書かれ、昭和52年(1977)の記録には「風流花傘(実信講)」「御錦蓋(米穀商御錦蓋講)」「御菅蓋(北信用友の会)」と記されているという。

錦蓋と菅蓋を描いた絵画資料がある。大正10年(1921)、吉川進が『夏祭渡御列図』(甲巻・乙巻)と『夏祭船渡御図』(甲巻・乙巻)を描いているが、『夏祭渡御列図』は天神祭の陸渡御を、『夏祭船渡御図』は船渡御を描写している。『夏祭渡御列図』甲巻には榊木講の「風流大傘」、同乙巻には松風講の「和琴と風流花傘」、米穀商の「御錦蓋」、久栄講の「御菅蓋」が登場する。また、『夏祭船渡御図』乙巻では榊木講・風流大傘の船1艘(本船列十号)、松風講と和琴と風流花傘の船1艘(本船列廿二号)、米穀商・御錦蓋の船1艘(本船列廿八号)、久栄講と御菅蓋の船1艘(本船列廿九号)が描かれている。

御錦蓋と御菅蓋、そして風流御花傘、風流大傘は近代以降に参加した出し物である。御錦蓋は現在(2010年現在)でも米穀商御錦蓋講が担当している。御菅蓋の担当講は久栄講から北信用友の会へと代わり、現在では講組織ではなく、天満宮が出すようになってい

る。風流大傘は大正10年の絵巻に登場するだけであるが、風流御花傘は松風講、実信講と代わり、現在は花傘講が担当している。

『大阪天満宮米穀商御錦蓋講八十年の歩み』に「明治二十四年（1891）米穀商有志相謀り、御錦蓋並大高張提灯を新調することを計画し、同業敬神有志より広く浄金を募集も同年は新調なった大高張提灯を捧持し、船渡御に奉仕、翌二十五年（1892）の祭礼は大水の為め船渡御は取止められたので、七月三日調製なった御錦蓋を捧持陸渡御に奉仕した。同時に米穀商御錦蓋講と命名した。天満宮の古い記録によると、明治二十五年七月九日、米穀商より御錦蓋を新調奉納すとあり、七月三日に調製納品された錦蓋を、九日に御本殿で修祓奉納したものである」と記されており、御錦蓋創始の経緯がわかる。

それでは、御錦蓋講ではこの錦蓋をどのような器物として考えていたのだろうか。同書に「御錦蓋とは御神霊が他へ移行せられるとき、御錦蓋の内部に御霊をお移してお送り迎えするに欠かすことの出来ぬ重要な神具で、その上部につけられた鸞鳥は害虫等を防ぎお護りするものである。これに対し、降雨時の際に用いられる神具は「菅蓋」と云い、北信用組合が捧持している」と記されている。

錦蓋を神輿と同様に神霊の移動時の容器であるという意識を持っていたようだが、これは下鴨神社の御蔭祭の錦蓋の影響と考えられる。天神祭の場合、錦蓋と菅蓋が神輿の代用として実際に使用されたことはなく、基本的に神輿に随伴する威儀具としての性格が強い。

（5）北野天満宮のずいき祭

京都市上京区馬喰町の北野天満宮では、毎年10月1日から5日にかけて「ずいき祭(瑞饋祭)」が行われる。10月1日が神幸祭で、4日が還幸祭となる。還幸祭の日は「おいでまつり」と呼ばれるように、菅原道真公の御霊が北野に来られる特別の日であると考えられており、還幸祭ではずいき神輿や牛車が氏子町を巡行する。10月1日午前9時30分に出御祭が催され、午後1時に神幸行列が北野天満宮を出発する。午後4時に西ノ京御輿岡町（中京区西大路上ノ下立売通西入ル）の御旅所に到着して着御祭を執行し、



写真7：北野天満宮ずいき祭の錦蓋

八乙女舞（田舞）が奉納される。御旅所では御鳳輦3基がずいき神輿と共に三日間駐輦する。2日は午前10時から表千家宗匠による献茶式が御旅所で行われる。3日は午後3時から甲御供奉饌かぶとのごくほうせんを西ノ京七保会が奉仕する。4日午前10時に出御祭が催され、午後1時に牛に曳かれた御羽車も加わって御旅所を還幸行列が出立し、氏子区内を巡幸する。ずいき神輿は12時30分頃に御旅所を出立して還幸行列とは異なる順路を巡行する。還幸行列は

午後4時に北野天満宮に到着し、午後5時から着御祭が執行される。5日は午後3時30分から后宴祭ごえんさいが催され、八乙女舞（田舞）が奉納される。還幸祭の還幸行列は次のような順列になっている。

獅子舞、太鼓、先駆神職、御榊、導山の山車、梅鉾、松鉾、御鉾、錦蓋、菅蓋、（途中、円町の南に下った所で、八乙女、稚児袴、汗衫、水干、半尻などが参加）、稚児袴、童子、御羽車、御剣、御弓、御楯、楽人（太鼓・鉦）、神職先導、汗衫、紫翳、御幣、柳箱、第一鳳輦、水干、紫翳、御幣、柳箱、葱鳳輦、半尻、紫翳、御幣、柳箱、第三鳳輦、馬車（宮廷馬車）、後駆神職。



写真8：北野天満宮ずいき祭の菅蓋

京都北野天満宮のずいき祭の名称は「ずいき（瑞饋）御輿」に由来する。ずいき御輿は祭礼期間中は御旅所に安置され、還幸祭の時に巡行する。

ずいき祭の神幸行列に錦蓋と菅蓋が登場し、神輿の前方を進む。

錦蓋は黒漆塗りの門字型枠から下げる垂下式蓋で、後ろでまっすぐに立てた鸞鳥（鳳凰）のついた棹を捧持する。錦蓋は直径約1.2mあり、その傘裂は白色絹布で、傘周囲に二重の帽額（幕）を下げる。上部外側の短い帽額は朱地に金の十六弁菊花紋と銀の小菊紋を散らしたもので、内側に吊す丈の長い帽額は菱形に組んだ松葉の間に梅花と松枝を散らした金襴である。傘上部中心から鈴をつけた朱色の長い飾り紐（総角結び）を6本垂らす。

御菅蓋は菅傘部が直径約1.2m、それを朱漆塗りの門字型枠で吊り下げる。傘周囲から錦蓋と同様の帽額を二重に下げる。上部外側の短い帽額は朱地に金の十六弁菊花紋と銀の小菊紋を散らしたもので、内側に吊す丈の長い帽額は菱形に組んだ松葉の間に梅花と松枝を散らした金襴である。外側上部の帽額から朱色の短い総角結びを6本垂らす。なお、菅蓋では鸞鳥は伴わない。錦蓋も菅蓋もいずれも二人で枠を捧持する。

8月4日の北野天満宮例祭は北野祭と称され、かつては官祭として本殿祭と神幸祭が一体となっていたが、応仁の乱によって神幸祭は途絶えてしまった。しかし、北野祭の本殿祭に供えるために奉納されていた野菜を用いて、大型の御輿1基を作って奉納するという氏子の祭りが、慶長年間（1596～1615）頃から行われるようになった。屋根をずいき芋で葺き、各部を穀物と野菜、湯葉や麩などの乾物類で隙間なく組み立て、四隅に下げる瓔珞は乾燥した金盞花を取り付けたもので、御輿の四面には謡曲や説話など、現在ではテレビアニメの登場人物のつくりものを取り付ける。江戸時代には8基のずいき御輿が出ていたが、現在は大型のずいき神輿と子供ずいき神輿の大小2基となっている。

明治初年、神幸祭の復興を願って多くの氏子有志が集まって梅風講を結成し、諸道具を調べて祭典経費を負担すること等を条件に京都府に請願し、明治8年に私祭として許可され、現在の日程で実施されるようになった。この時にずいき御輿も取り入れられ、従来の

8月4日の北野祭は例祭として本殿祭が執行されるだけとなった。現在のずいき祭りは神幸祭であり、錦蓋と菅蓋は明治8年の再興時に加えられた威儀具であろうと推測される。

(6) 諸社における垂下式錦蓋

錦蓋と菅蓋との組合せは、各地の神社の祭礼で用いられている。神戸市の湊川神社楠公祭、宮崎市の宮崎神宮大祭、讃岐の金刀比羅宮例大祭（おとうか）、大阪市の阿倍王子神社夏季大祭、天理市の石上神宮渡御祭、松江市の城山稲荷神社のホーランエイヤ、東京の日枝神社山王祭、熊本市の藤崎八幡宮秋季例大祭などの祭礼において、錦蓋と菅蓋が登場する。ここで、いくつかの神社の錦蓋と菅蓋を紹介する。

湊川神社の楠公祭

兵庫県神戸市中央区の湊川神社では5月25日の楠公祭の御神幸の神輿に錦蓋と菅蓋が随行する。錦蓋と菅蓋はいずれも門字型枠に吊り下げる垂下式の蓋である。なお鸞鳥のついた棹は錦蓋に随伴するが、菅蓋にはない。

湊川神社は明治5年（1872）に新たに創始された神社で、祭神は楠木正成（大楠公）とその夫人、子息楠木正行（小楠公）の他一族16柱と菊池武吉である。鎮座に際して、楠木正成が5月25日に戦死したことから、その日を新暦に直した7月12日が例祭（官祭）と定められた。これに対して、5月25日は氏子たちが催す私祭として楠公祭が始まり、明治7年には御輿渡御と大楠公が率いる騎馬武者の供奉も行われるようになった。戦後は連合軍の占領政策の影響で、昭和40年までは簡略化されて渡御が行われていたが、それ以降は地下鉄や道路工事などでなかなか実施できなかった。平成14年は鎮座130年、墓碑建立310年、社殿復興50年という節目であったため、楠公武者行列の再興が行われ、それ以後毎年実施されるようになった。楠公武者行列（神幸祭）は昭和10年に装具と行粧等が改変されており、平成14年の復活時は昭和10年（1935）の改変に則して復元されているという。錦蓋と菅蓋の随行が始まったのは何時かは正確にはわからないが、近代になってからであることは間違いない。

宮崎神宮の大祭

宮崎神宮では10月26日の御神幸祭の行列に錦蓋と菅蓋とが登場する。この両蓋は口字型の枠に垂下する形式である。宮崎神宮は神武天皇が東征する以前の宮の場所と伝え、神武天皇宮（社）とか神武天皇御廟などと称されていたが、明治維新によって神武天皇は脚光を浴びるようになり、明治6年（1873）に県社に定められた時に宮崎神宮と改称され、明治8年に国幣中社、同18年には国幣大社に昇格している。宮崎神宮の大祭は明治13年に創始され、明治42年に現在の御神幸祭の形に整備された。このことから宮崎神宮大祭の御錦蓋と御菅蓋は明治42年に始まったと考えてよいだろう。

金刀比羅宮例大祭「おとうか」

讃岐の金刀比羅宮では、10月10日の例大祭「おとうか」の御神幸に絹傘、錦蓋、菅蓋が随伴する。江戸時代、讃岐の金比羅様は象頭山松尾寺金光院であり、修験を中心とした神

仏混淆の寺院であった。人々から金比羅権現として親しまれ、各地に金比羅講が組織されて盛んに金比羅参りが行われた。しかし、明治元年（1868）の神仏分離令によって、寺院であった象頭山松尾寺金光院は廃され、金刀比羅宮に改変されて現在に至っている。

金刀比羅宮例大祭「おとうか」は、近世には既に行われていたというが、寺院の行事として今のものとは相当違う祭礼であったと思われる。特に渡御行列の構成は現行とは異なっていたであろう。現在の例大祭の形式に整備されたのは、明治以降と考えて差し支えないと思われる。

日枝神社の山王祭

東京千代田区の日枝神社の山王祭の神幸行列に錦蓋と菅蓋が登場する。御鳳輦2基と宮御輿1基の前に菅蓋、後ろに錦蓋が随行する。錦蓋は直径約1.2m、二段の帽額を垂れ、傘縁から8本の飾り紐を下げ、背後から鸞鳥のついた棹を差し掛ける。杵は鉄製で台車と一体となった構造で、これを紅白の紐で引くようになっている。菅蓋は直径約1.2m、一重の朱錦の帽額を垂れる。日枝神社は江戸の町の西半分の総鎮守で、東側の総鎮守神田明神（神田神社）の神田祭とともに將軍上覧の榮譽を誇り、御用祭、天下祭と称した。山王祭は神田祭・深川祭と並んで江戸三大祭りのひとつとされてきた。幕末期には供奉の山車が60基を超えるほどであったが、関東大震災と第2次世界大戦での戦災によってほぼ消滅し、現在は町神輿主体の祭礼へと変化して、錦蓋と菅蓋の導入は戦後のことと推測される。

阿倍王子神社の夏季大祭

大阪市阿倍野区の阿倍王子神社では、7月28日の夏季大祭の行列に錦蓋と菅蓋が登場する。昭和6年（1931）に神幸祭の諸道具すべてを新調し、それ以来古式に則した渡御行列を行ってきたという。どうもこの時に錦蓋と菅蓋が加わったのではないかと思われる。

（7）近代における垂下式蓋

これまでの垂下式の錦蓋と菅蓋についてまとめてみたい。

下賀茂神社の御蔭祭と直方多賀神社の日若祭の錦蓋は、神馬に載せた御神体を覆う道具で、神輿の機能と一脈通じるものがある。しかし、その他の神社の垂下式の錦蓋と菅蓋の組み合わせは神輿の威儀具に過ぎない。神輿があるため、「御神馬御錦蓋」のような神馬に錦蓋を差し掛ける必然性が無くなっているのである。また、垂下式の錦蓋と菅蓋の神輿への随行では、祭礼町などの地域社会が担当ではなく、神社側が捧持者などを手配する。

垂下式の錦蓋と菅蓋が神幸行列に登場する神社の中には、祭礼を近代に創始した所もある。あるいは祭礼だけではなく神社それ自身が近代に創建された所さえある。新たに創始された神幸行列では、威儀具の整備は緊急の課題であったであろう。そこに普段見ることのできない、垂下式の錦蓋や菅蓋は神霊の威儀具として新鮮で強い印象を観衆に与えたものと思われる。

このようなことから、冂型杵垂下式の錦蓋と菅蓋は、御蔭祭の錦蓋を真似て近代になっ

て各地の神社が神幸行列の威儀具として導入されたものと思われる。

なぜ、神馬を覆う蓋は、錦蓋でなくてはならなかったのだろうか？。御蔭祭の錦蓋は、鸞鳥のついた棹の先を杵に載せることから、大嘗祭の菅蓋の影響を強く受けているものと考えられる。しかし、大嘗祭の菅蓋の単なる模倣なら、錦蓋ではなく菅蓋でも良かったと思われる。御蔭祭で当初から用いられていたのは錦蓋だったのではないだろうか、そして垂下式錦蓋として御蔭祭において独自の発展を遂げ、独特な形態を持つようになったと考えられる。大嘗祭の菅蓋は鸞鳥のついた棹で吊り下げられ、二本の綱で天皇の頭上にくるように調整されていた。しかし二本の綱は、捧持される冂字型杵へと変貌し、鸞鳥のついた棹で吊るの必要がなくなり、鸞鳥は見かけ倒しの付属物へと変化してしまったと思われるのである。

錦蓋が神輿の神幸行列の威儀具として用いられるようになり、伊勢神宮の錦蓋と菅蓋の影響を受けて、冂型杵垂下式菅蓋として取り入れられたのであろう。これは江戸後期から盛んになる国学がなんらかの影響を与えたためではないだろうか。

(8) 祭礼における錦蓋事例集

【事例1】上野天神宮の上野天神祭

三重県伊賀市の上野天神宮（菅原神社）では、毎年10月19日から26日にかけて上野天神祭（上野天神宮秋祭）が行われる。19日早朝、神輿2基が本社から東旅所へ渡御する。東旅所で23日と24日に宵宮祭を行い、25日に参列する稚児の宵宮参りがあり、宣状が授与される。23日は「宵山」で、蔵から各町は「印」と「だんじり（楼車）」を出し、飾り付けをして展覧に供し、夜は提灯に点灯する。24日には「足揃えの儀」を行い、午後、鬼行列が相生町から三之町筋を練り歩き、だんじりは自町内を巡行する。夜になるとだんじりの提灯に点灯して、自町内と銀座通りなどを曳行する。25日は「本祭」で、神幸行列、鬼行列、印とだんじりの巡行が行われる。東旅所から西旅所へ渡御して昼祭を行い、夕方に本社に還御して例大祭が執行される。本祭での行列の順序は以下の通りである。まず最初は①神輿行列で、次に②鬼行列、そして③印とだんじりとが続く。

①神輿行列／前駟・金棒獅子・真杵・錦旗2・稚児・楯鋒毛槍2・供奉児童・八乙女・弓矢2・錦旗2・荷大鼓伶人・錦蓋・菅蓋・神輿2・氏子青年・宮司・禰宜・釣台。

②鬼行列／指導（拍子木）・金棒引き・厄払4・御幣（印持）・悪鬼（般若）・小鬼4・八天鬼8・四天鬼4・脇立鬼（青赤）2、役行者・行者腰掛持・山伏（貝吹）4・先達・奴（先達傘持）・先達腰掛持・義玄鬼2・釣鐘鬼と笈持鬼（ひよろつき鬼）2・斧山鬼2・車引2・太鼓台・太鼓打・先曳（武士）2、印（印持ち）・小鬼10数名・赤鬼・青鬼・四天鬼・鎮西八郎為朝・奴（傘持ち）・車引2・太鼓台・太鼓打。

③だんじり（楼門車）／薙刀鉾（新町）、桐本（東町）、其神山（葵鉾・中町）、花冠（西町）、鉄英剣鉾（向島町）、二東（月鉾・鍛冶町）、紫鱗鉾（魚町）、小蓑山（小玉町）、三明（福居町）〔順不同〕。なお、印には白楽天（新町）、菅公（東町）、菊慈童（中町）、鞆

鼓（西町）、琴高仙人（魚町）、三社の託宣（小玉町）、町名緋幟（福居町）がある。

鬼行列は役行者と鎮西八郎為朝が中心で、いずれも悪疫を象徴する鬼を屈服させて悪疫を退散させることに主眼がある。役行者を中心とする鬼の一団は、紺屋町・相生町・三之西町の3町で組織する三鬼会によって行われ、赤鬼と青鬼を従えた役行者の大峯山入峯の姿を表しているという。為朝を中心とする一団は徳居町が担当しており、鬼ヶ島を征伐した為朝が鬼たちを従えて凱旋する姿であるという。

【事例2】湊川神社の楠公祭

兵庫県神戸市中央区多聞通の湊川神社では、毎年5月25日に楠公祭が行われる。前日午後5時には宵宮祭が執行され、25日の本祭では祭典の後に楠公武者行列（神幸行列）が湊川公園の御旅所まで渡御する。翌26日午前10時には翌日祭が行われる。25日午前10時に湊川神社を出発、11時前後に元町四丁目を通り、中突堤・タワーサイドホテル南、ハーバーランド、高浜岸壁を11時半頃に通過し、12時前後に東川崎交差点、新開地商店街、12時半頃に湊川公園に到着。御旅所祭と昼食をとって休憩。午後2時に湊川公園を出発し、3時前頃に荒田グランド北角、一柳筋、3時過頃に多聞通交差点、3時半に湊川神社に還御する。神幸行列は、前陣武者列、神幸列本社、神幸列甘南備神社の次のような3構成である。

①前陣武者列／1) 鉄杖2本2名、2) 侍2名、3) 高張提灯2挺2名、4) 太鼓1挺6名、5) 大麻2本2名、6) 社号旗1本13名・猿田彦3名、7) 大榎2本8名、8) 前駆兵1名、9) 列奉行／騎馬・口取・他各1名、10) 大楯2枚6名、11) 陣貝1挺1名、12) 陣太鼓1挺6名、13) 先駆1名、14) 錦旗／騎馬・口取・旗持各1名・他2名、15) 菊池武者／騎馬武者・口取・旗持各1名、16) 江田武者（同）、17) 伊藤武者（同）、18) 箕浦武者（同）、19) 岡田武者（同）、20) 矢尾武者（同）、21) 和田武者（同）、22) 神宮寺武者（同）、23) 正行公（同）、24) 将前兵1名、25) 菊水旗／騎馬武者・口取・旗持・他各1名、26) 大将（同）、27) 副将（同）、28) 橋本武者（同）、29) 富田武者（同）、30) 恵美武者（同）、31) 河原武者（同）、32) 宇佐美武者（同）、33) 三石武者（同）、34) 安西武者（同）、35) 南江武者（同）、36) 女房／騎馬婦人・口取各4人、37) 兵士／薙鎌1名・熊手1名・弓矢4名、38) 矢櫃1荷4名、39) 飼葉桶1荷4名、40) 押侍1名。

②神幸列本社／41) 鉄杖2本2名、42) 侍1名、43) 高張提灯2挺2名、44) 楯杖1本1名、45) 舞人陵王1名・付添1名、46) 舞人抜頭（同）、47) 舞人撤手（同）、48) 道楽太鼓1挺9名、49) 一鼓1名、50) 荷鉦鼓1挺9名、51) 伶人／6名・付添2名、52) 四神旗4本4名、53) 大榎（昇山型）9名、54) 切麻・散米2名、55) 神饌大唐櫃1棹4名、56) 御楯2枚2名、57) 御棒2本2名、58) 御弓1張1名、59) 御胡籙1挺1名、60) 御太刀1振1名、61) 紫御翳2本2名、62) 菅御翳2本2名、63) 隨身2名、64) 御輿1基／宰領2名・加輿丁50名・手替40名・呉床2名、65) 錦蓋1基（垂下型）6名、66) 鸞鳥1挺3名、67) 菅蓋1基（垂下型）6名、68) 神馬1頭2名、69) 御巫（騎馬）1名・口取1名、70) 宮司（騎馬）1名・口取他2名。

③神幸列甘南備神社／71) 高張提灯2挺2名、72) 社号旗1本（昇山型）12名、73) 稚

見行列／男30名・女30名、74) 風流傘1基(昇山型)12名、75) 神饌唐櫃1棹4名、76) 御楯2枚2名、77) 御杵2本2名、78) 御弓1張1名、79) 御胡籙1挺1名、80) 御剣1振1名、81) 紫御翳2本2名、82) 菅御翳2本2名、83) 葱華輦／宰領2名・御綱4名・加輿丁16名・手替12名・呉床2名・手代2名、84) 錦蓋1基(垂下型)6名、85) 鸞鳥1挺3名、86) 菅蓋1基(懸垂型)6名、87) 神職(禰宜・騎馬)1名・口取1名、88) 供奉員・総代・同族会等、89) 特別稚児(トラック2台に分乗)。

【事例3】宮崎神宮の神幸祭

宮崎市神宮の宮崎神宮では、毎年10月26日午前10時から本宮例祭が執行され、26日後の最初の土・日曜日に宮崎神宮大祭(神幸祭)が行われる。金曜日午後5時から10時に大祭前夜祭が催され、県庁前楠並木通り(雨天時は若草通りアーケード内)で「夜神楽の祭典」が行われる。土曜日午後1時から3時にかけて、宮崎神宮から御旅所に向かう御神幸(往路の渡御)が行われる。御旅所は瀬頭と大淀とで隔年で交替となり、平成20年は大淀御旅所であった。順路は宮崎神宮を出発して、江平、橋通、市役所前、大淀橋(旭通)を経て、大淀御旅所(瀬頭)となる。翌日の御神幸(復路)はその逆である。渡御行列は御神幸行列と神賑行列に分かれている。前者は宮崎神宮が主管し、獅子舞、御鳳輦(御神輿)、威儀具列、御錦蓋、御菅蓋、男女稚児行列(約100名)、流鏑馬武者行列(68名)、子供御輿(160名)など総勢820名ほどが参加する。後者は宮崎商工会議所が主管し、2007年の大祭では、神武こども太鼓、ミス・シャンシャン馬(6組、約60名。昭和24年から始まる)・よみがえる古代(約130人・古代服着用)、古代船「おきよ丸」(44名。古代船型山車・平成17年創始)、日向木剣おどり(約100名)、日向ひょっこ踊り(25名)、山之口弥五郎どん(約120名)、宮崎JCこども太鼓(約100名)が参加して、総勢約600名であった。午後6時から9時30分まで神武様広場で神賑祭が行われる。神武様広場とは宮崎駅前から山形屋までの643mの道路のことで、平成19年には宮崎市消防団音楽隊と宮崎雅楽会による演奏があり、太鼓演奏では橋太鼓響座・山形屋紅太鼓・雲海木挽き太鼓・翼太鼓「凜和」・高洲保育園こども太鼓・宮崎JC太鼓が出演した。郷土芸能ではひょっこ踊り、夜神楽では銀鏡神社・江田神社・船引神社・住吉神社・岩崎稻荷社などの神楽と椎葉神楽が演じられた。大道芸では街頭紙芝居や大江戸曲芸その他が行われ、四半的弓道や大綱引大会も催された。日曜日の復路の御神幸では、午後1時に御旅所を出発して、午後3時に宮崎神宮に還御となる。

【事例4】讚岐の金比羅宮の例大祭「おとうか」

香川県多度郡琴平町の金刀比羅宮では、毎年10月9日から11日にかけて例大祭「おとうか」が行われる。なお、例祭に伴う8月31日の口明神事から10月15日の焼払神事までの46日間の諸祭典を「御大祭祝舎神事」という。

8月31日、祝舎神職が「口明神事」を執行する。この大祭の始まりを意味する。9月1日、金倉川(潮川)の傍らの神事場(御旅所となる)で「祝舎地鎮祭」を行い、祝舎の建築を始める。9月8日、御旅所において「潮川神事」を執行し、例祭に奉仕する者一同が祓除を行う。9月9日、祝舎において「御幣立神事」を執行。五人百姓が祝舎に御幣を

立て、これをもって祝舎は神屋となる。9月10日、祝舎において「入宿神事」を執行。昔はこの日から頭人が祝舎に泊まり込み、精進潔斎の生活に入った。現在は頭人の代わりに祝舎係が奉仕する。10月6日、祝舎において「指合神事」を執行。これは祝舎で最も重要な儀式で、宮司が斎主となって奉仕し、来年の頭屋を決める。10月8日、この日から例祭に奉仕する者全員が参籠潔斎に入って心身を浄める。10月9日、本宮（金比羅宮）において宵宮祭を執行する。祭典では八乙女舞が奉納される。

10月10日、午前10時から本宮で例祭が行われ、祭典で神主舞と諸司舞が奉納される。午後4時から神幸祭を執行。頭人は行列を組んで祝舎から金比羅宮へ向かう。頭人式を行い、引き続き祓戸社で修祓を受けて、本宮において金幣式を行い、五人百姓から供応を受ける。三穂津姫社でも同様の祭儀が行われる。午後9時、本宮から御旅所まで御輿の渡御が行われる。約2kmの行程を3時間かけて進む。男頭人の童男と女頭人の童女は例祭において重要な役割を果たしているため、例祭では「御頭人さま」と呼ばれる。その順列は次の通り。

1)先供の奴組、2)頭人行列<騎馬の男頭人2名・駕籠の女頭人2名を中心とする>、3)講員、4)氏子総代、5)五人百姓、6)庄官、7)祝舎神職、8)神馬、9)御唐櫃、10)御琴箱、11)巫女、12)舞人、13)太玉串、14)伶人、15)御神宝、16)御剣員、17)啓行員、18)御紫翳、19)御御輿、20)御菅翳、21)御絹傘、22)御錦蓋、23)御菅蓋、24)宮司、25)禰宜、26)主典、27)祭員。

真夜中、御旅所で行宮着御祭を執行する。祭典では神主舞と諸司舞が奉納される。

10月11日、午前10時から行宮で献馬式があり、東遊が奉納される。午後2時、行宮上奏祭で金刀比羅舞が奉納される。御神事場では神賑行事として出雲神楽などが演じられる。午後4時に還幸祭が執行され、祭典で八乙女舞が奉納される。午後9時に御輿渡御の行列は本宮に還幸する。深夜に本宮にて報賽祭を執行。解齋歌を奏し、例祭すべての諸行事を終える。同じく深夜に祝舎で「御幣下神事」を行い、祝舎に立てていた御幣を下ろす。10月14日、その年の頭人と来年の頭人が金比羅宮に昇殿して「頭屋渡し」の神事を行う。本祭から三日経過しているため、これを「頭人三日詣」という。10月15日、「焼払神事」といって祝舎を取り壊して焼き払う。

【事例5】日枝神社の山王祭り

東京都千代田区永田町に鎮座する日枝神社では、隔年で6月15日に山王祭（日枝神社大祭）を行っている。午前7時45分に日枝神社を出立した神幸行列は、元山王の国立劇場、坂下門（参賀、神符献上）、東京駅丸の内側、日本橋日枝神社（撰社）、京橋三丁目、銀座四丁目、新橋一丁目などを経て、午後5時に日枝神社へ還御される。

列次は以下の通りである。先導神職、副宰領、御防講、竹棹持、諫鼓鳥（山車）、太鼓、神幸祭旗、祭典副委員長（騎乗）、金棒、高張（提灯）、鼻高面と朱傘、賛者、大真榊、錦旗、大幟、禰宜（騎乗）、賽物係、獅子頭、副宰領、権禰宜、御神馬、御弓、御胡籥、御鉾、御楯、御太刀、禰宜（騎乗）、舞姫、童女、楽人、錦旗、錦旗、菅翳、菅蓋、日枝神社氏子総代連高張（提灯）、副宰領、権禰宜、竹棹持、御鳳輦（前後に御綱取）、竹棹持、

御鳳輦（前後に御綱取）、竹棹持、宮御輿、宰領、紫翳、錦蓋、宮司（人力車）と朱傘、人力車付、権禰宜、祭典委員長（人力車）、祭典副委員長（人力車）、禰宜（騎乗）、権禰宜、日枝神社氏子総代連高張（提灯）、総代連、日枝神社奉賛青年会高張（提灯）、青年会旗、日枝神社葵会連高張（提灯）、葵会連、竹棹持、花山車、竹棹持、干支山車、竹棹持、美少年山車、竹棹持、御幣を担ぐ猿山車、用土方、竹棹持、東郷元帥山車、竹棹持、牛若大山車。

【事例6】阿倍王子神社の夏季大祭

大阪市阿倍野区阿倍野元町の阿倍王子神社では、7月28日に夏季大祭が行われる。前日の夏祭宵宮祭では各地区ごとの催し物が各氏子地域を廻る。28日午前12時30分から祭典が行われ、午後1時30分に御発輦となり、午後3時頃に御旅所祭を執行し、午後5時に阿倍王子神社に還御して還幸祭を行った後、直会となる。昔は神職は馬に乗り、渡御行列は徒歩で1日かけて阿倍野区内を練り歩いたが、交通事情が悪化したため、昭和38年（1963）からトラックや自動車による渡御になった。渡御行列は以下の通りである

①先導車（氏子青年会／乗用車）、②指揮車（交通安全協会／乗用車）、③枕太鼓（阿倍野地区役員／4t車）、④猿田彦（金塚地区役員／2t車）、⑤獅子（阪南地区役員／2t車）、⑥錦旗・大賢木^{おおさかき}（祓所役・丸山地区役員・常盤地区役員／2t車）、⑦稚児（稚児委員会役員／マイクロバス2台）、⑧御鳳輦（楽人・清明丘地区役員／4t車）、⑨祭員（宮司・祭典委員長・供奉員・巫女／2t車）、⑩錦蓋・菅蓋（文の里地区役員／2t車）、⑪神輿（神職・阿倍野地区役員／4t車）、⑫壇尻囃子（王子地区役員／4t車）。

【事例7】石上神宮の渡御祭

奈良県天理市布留町の石上神宮では、毎年10月14日から16日に「ふるまつり」（布留祭渡御祭）が行われる。御旅所が田町（旧田村）にあることから、「田村渡り」とも呼ばれる。14日午後3時には宵宮祭、15日に例祭と渡御が行われ、16日午前10時に後宴祭が行われる。

15日午前9時、天理市田町の御旅所から衣冠姿の稚児が御幣を捧持して騎馬で石上神社に参する。10時30分から例祭が行われる。稚児は社頭で修祓を受け、宮司以下祭員とに拝殿に昇殿する。神饌と共に荷先^{のさき}（新穀初穂）が供えられ、奉幣の古儀の後、例祭の祭が執行される。その後、御鳳輦に御神霊を遷す御霊代遷御の儀が行われ、午後1時に渡出発の儀が行われ、御鳳輦と各町内から練り出す子供神輿を中心した渡御行列が出発する布留町の石上神宮を出発した渡御の行列は、境内摂社恵比寿神社前を通り、布留交差点左折して西方に向かい、国道25号線を通り、天理教教会本部（三島町）、天理本通り（川城町）、天理駅の前で左折して南下し、上街道、市座神社前（丹波市町）、JR位線踏切通過し、田町の巖島神社（御旅所）までの約4kmの巡幸である。午後2時に御旅所祭が行われ、神楽が奉納される。その後、御旅所を出立して、午後4時過ぎに石上神宮に還御する。

この例祭は永保元年（1081）に白河天皇の勅使が石上神宮に参向して走馬十列を奉納したことに始まると伝える。現在の順列は以下の通りで、順・名称・員数を記す。

- 1) 先払（大紋・侍烏帽子に金棒）2名、2) 太鼓（白丁）2名、3) 社号旗（緑狩衣）

1名、4)花鉾(青旗雑兵)2名、5)甲冑(騎馬・氏子世話係)1名、6)花鉾(黄旗雑兵)2名、7)甲冑(騎馬・氏子世話係)1名、8)花鉾(赤旗雑兵)2名、9)天理市長(騎馬・衣冠)1名、10)傘持(白丁)1名、11)錦旗(海老茶狩衣)1名、12)錦旗(海老茶狩衣)1名、13)猿田彦(狩衣)1名、14)御幣(赤衣)1名、15)梅枝くずはえ>(海老茶狩衣)1名、16)伶人(直垂)4名、17)舞人(舞衣)2名、18)田村奉幣稚児(騎馬)1名、19)神饌司(直垂)田町一行、20)唐櫃(緑狩衣)2名、21)神職(騎馬・衣冠)1名、22)傘持(白丁)1名、23)氏子献幣使(騎馬・衣冠)1名、24)傘持(白丁)1名、25)真榊(白丁)4名、26)氏子総代(袴)7名、27~28)御楯(直垂・氏子世話係)4名、29~30)御鉾(同)2名、31~32)御矢(同)2名、33~34)御太刀(同)2名、35~36)御翳(緑狩衣)2名、37)御鳳輦(石上神宮自警団・天理青年会議所・天理市商工会青年部・天理消防団第一分団)、38)御錦蓋(海老茶狩衣)4名、39)鸞鳥(緑狩衣)1名、40)宮司(騎馬・衣冠)1名、41)風流傘(緑狩衣)1名、42)錦旗(海老茶狩衣)1名、43)麻籠(海老茶狩衣)1名、44)麻籠(海老茶狩衣)1名、45)欄宜(騎馬・衣冠)1名、46)傘持(白丁)1名、47)花鉾(白旗雑兵)2名、48)花鉾(紫旗雑兵)2名。

【事例8】城山稲荷神社のホーランエンヤ

鳥根県松江市殿町の城山稲荷神社では12年に1度ホーランエンヤが執行され、その神幸行列に錦蓋が随行する。慶安元年(1648)、出雲国が大凶作に見舞われ、松江藩主松平直政は稲荷神社の社司を兼務していた阿太加夜神社(八束郡東出雲町)の神主松岡兵庫頭に命じて、城山稲荷神社の神霊を阿太加夜神社へ船で運んで五穀豊穰を祈願させた。これがホーランエンヤの始まりで、それ以後12年ごとに執行されている。ホーランエンヤは9日間にわたって行われ、直近では平成21年5月16日(土)から24日(日)に催された。

第1日(5月第3土曜日)は渡御祭で、城山稲荷神社での神事後、陸行列で大橋川河畔へ渡御し、神霊を神輿船に遷し、この時に神輿の前に垂下式の錦蓋、後ろに同様の菅蓋が進む。大橋川で清目船による御祓の後、權伝馬一大船行列が出立する。權伝馬踊りを奉納し、約100隻の船団は約10km離れた東出雲町出雲郷の阿太加夜神社に向かう。2~8日目には阿太加夜神社で大祈祷が行われる。5日目は大祈祷の中日で、阿太加夜神社に權伝馬が参入する。權伝馬船での權伝馬踊りの披露の後、權伝馬は5隻の陸船に乗り換えて出雲郷橋から阿太加夜神社へと向かう。權搔きたちが曳く船上で役者たちが踊り、境内で五大地が順番に權伝馬踊りを奉納する。9日目は還御祭で、初日の渡御祭とは逆の経路をたどって阿太加夜神社から城山稲荷神社に神幸する。船行列でお供をする權伝馬船では權伝馬踊りを披露される。上陸した後、神幸行列は陸路城山稲荷神社に向かい、神社で還御祭を執行して、9日間のホーランエンヤは終了する。

【参考文献】

- ・新木直人『葵祭の始原の祭り―御生神事―御蔭祭を探る』ナカニシヤ出版・2008。
- ・米山俊直『天神祭』中公新書543・中央公論社・1979. 6. 25。
- ・『大阪天満宮米穀商御錦蓋講八十年の歩み』大阪天満宮米穀商御錦蓋講・1972. 12。
- ・『天神祭 火と水の年祭礼』大阪天満宮文化研究所編・思文閣出版・2001。
- ・『上野天神祭だんじり』上野市文化美術保存会・上野市観光協会・1972. 10。